

COVER INTERVIEW My Purpose 挑戦する人

## 平安貴族の典雅な祭礼を、 時を越えて受け継ぐ 葵祭・第62代齋王代として脚光を浴びる

葵祭は上賀茂(賀茂別雷)神社と下鴨(賀茂御祖)神社の大祭であり、祇園祭、時代祭とともに京都の三大祭として名高い。欽明天皇の時代に災害と凶作に見舞われたために、五穀豊穡を祈願したのが起源とされている。『源氏物語』に記された齋王列見物における葵の上と六条御息所の争いの描写などでも、往時の典雅な祭儀の姿を垣間見ることができる。古来、賀茂祭とも称されてきたが、祭事に葵の葉をかざしたところから葵祭と呼ばれるようになった。葵祭の前儀としては、祭礼の無事を祈願する勇壮な流鏑馬神事、齋王代や女人列に奉仕する女性が身を清める御禊神事、荒御霊を迎える御蔭祭などが執り行われる。齋王とは朝廷を代表して神に仕える女性のことで、かつては未婚の内親王、王女が務めた。鎌倉時代に途絶えた齋王は、戦後の1956年に齋王代として復活し、京都在住の未婚の女性の中から毎年選ばれている。

「葵祭行列保存会から連絡をいただいた時は、一瞬絶句するほど驚きました。実は以前、姉が葵祭に参加しており、その姿に憧れていました。『いつか私も女人列に出たい!』と、家族の前ではしゃいでいたのを覚えています。でも、まさか齋王代に選ばれるとは、夢にも思っていないでした。一番緊張したのは齋王代発表の記者会見です。会場のホテルの控室から先頭を歩かなければならないので、重圧で足がすくむ思いでした。会見でも『どうか無事に終わって…』と祈っていました」。富田紗代さんは19歳という若さでも注目され、齋王代を含む3姉妹での参列も大きな話題になった。

齋王代の髪型は雅な趣のおすべらかしで、装束は華麗な十二単衣。化粧を含めて支度には、2時間前後を要する。

「リハーサルのようなものは一切ありません。御禊神事に関しては、記録映像を収録したDVDをご提供いただき、これを繰り返しチェックして、全ての所作を確認しました。特に水に手を浸し、身を清める時は、顔を適度に上げ、時間も少し長めにとというご指示を受けていたので、間違いのないように注意しました。思いのほか、水が冷たかったのを覚えています」。京都御所から下鴨神社を経て上賀茂神社まで巡行する「路頭の儀」には、落ち着いて臨むことができたという。「あなたが思う齋王代を自由に表現してもらえば」という関係者の言葉を受けて、笑顔で心がけたとふり返り、齋王代が乗る「腰輿」からは周囲がよく見え、吹き抜ける緑風も心地良かったと微笑む。

同志社大学に進学したのは、幼少の頃から仲が良く、可愛がってくれた姉2人が本学で充実した日々を過ごしていたから。5歳の時からタップダンスに打ち込んできた富田さんが同志社女子中学校1年生の時からソフトボールを始めたのも、当時、高校3年生でクラブの部長として活躍していた一番上の姉の影響だと語る。現在、自分のやりたいことを見出すために、分野を超えて幅広く知見を得ることのできる政策学部で学んでいるが、齋王代に選ばれたのを機に、日本の伝統や文化の継承に関わる勉強にも取り組んでみたいと思っている。「平安時代からの祭礼を受け継ぐ側に立って、京都の伝統文化の大切さを改めて実感しました。今年の春から茶道を習い始め、十二単衣や振袖の素晴らしさも知り、和の心にも思いを馳せるようになりました」。齋王代という貴重な経験を糧に、富田さんは、新たな一歩を踏み出そうとしている。



とみた さよ  
富田 紗代さん  
[政策学部 2年次生]